

# 火野葦平の自己形成と教育

——若松尋常小学校、小倉中学時代の「成績表」——

増田周子

## 序

作家の自己形成に教育はどのような意味を持つのであろうか。文学者を志したのは、いったいいつであらうか。幼少時、思春期に何を考え、どのような学校生活を過ごしていたのかを探ることは、作家の伝記的研究には欠かせない。本稿では、火野葦平の尋常小学校、小倉中学時代の「成績表」についてとりあげ、火野葦平の自己形成を探ってみたいと思う。なお、本稿でとりあげる「成績表」は、火野葦平資料館に収蔵されているものであるが、学術論文で紹介されたこと<sup>①</sup>はない。

はじめに、火野葦平とはどんな作家であったのかを、簡単に記してみた。火野葦平の略歴については、火野葦平が記した「年譜」<sup>②</sup>が詳しいので、それに依拠してまとめてみる。

火野葦平は、明治四〇年一月二五日福岡県遠賀郡若松町新仲松

に、父金五郎、母マンの長男として誕生する。本名は、玉井勝則であった。この年は、ちょうど、日本が日露戦争に勝利した翌年で、北九州の八幡製鉄所の第一鋳炉に火が投ぜられてまもなくの頃であった。また、父玉井金五郎が、筑豊炭田の石炭を集積し、若松の港から荷役請負業（玉井組）を開業した年でもあった。旧制小倉中学に行き、文学に関心を寄せ、早稲田大学高等学院のときには童話集を自费出版する。大正一五年、早稲田大学英文学部に入學し、大では田畑修一郎、中山省三郎らと『街』を創刊し、詩誌を発行して、精力的に文学活動を展開していった。

昭和三年、福岡歩兵二四連隊に入隊した。除隊後の昭和五年、若松の芸者ヨシノと結婚する。この妻の旧姓日野良子が火野葦平というペンネームの由来であった。除隊後は家業の沖仲士「玉井組」を継ぎ、若松沖仲士労働組合を結成して書記長に就任し、労働運動にかかわった。昭和七年に上海事変が勃発すると、苦力がストライキ

をしたために、玉井組は五〇人の仲士とともに上海に派遣された。その後日本に戻るが、留守中に全国的な共産党検挙があり、若松駅に到着するなり若松警察署に連行された。その頃日本共産党とコミニズムに疑惑を感じ始めていた火野は、検挙をきっかけに転向を決意し、昭和九年、小倉で発行されていた詩誌『とらんしつと』に参加して再び文学活動を開始する。この年、火野葦平から葦平へと改名するのである。

昭和一二年に、日華事変が始まり、同年九月一〇日に伍長として応召され、南京攻略に参加した。杭州攻略にも参加して杭州に駐留する。昭和一三年三月八日「糞尿譚」(文学会議)昭和一二一年一月一八日)で第六回芥川賞を受賞し、文藝春秋特派員の小林秀雄から芥川賞の時計を受け取った。陣中での授与式が行われ、話題となる。続いて、戦闘中の兵隊の生々しい人間性を描き、戦地から送った従軍記『麦と兵隊』(昭和一三年九月一九日、改造社)が評判を得て人気作家となった。続いて『土と兵隊』(昭和一三年一月二四日、改造社)、『花と兵隊』(昭和一四年八月一日、改造社)の兵隊三部作と呼ばれる作品を発表し、帰還後も「兵隊作家」として国民的英雄に祭り上げられていく。アジア・太平洋戦争勃発後の昭和一九年、報道班員として従軍を命ぜられる。軍部との連携を深め、各戦線におもむき、従軍作家として活躍した。しかし、昭和二〇年八月一五日に日本が無条件降伏をすると、火野葦平は、連合軍から公職追放の該当者として指名されるのである。それを受けて、

志賀直哉が昭和二三年四月五日付で政府に「証言」を提出する。火野葦平資料館には、この「証言」が収蔵されている。『志賀直哉全集』(平成一〇年二月〜一四年三月、岩波書店)には収載されていない貴重なもので、歴史的資料としても価値があるので、その内容を全文引用する。

### 証言

今回、中央公論公職適否審査委員会に於て、文章家の該当仮指定が行はれたが、その中に含まれてゐる作家火野葦平に就いて、私は次の如く確信し、証言します。

一、原則的に芸術家は自由主義者であつて、悪質の政治的意図の下に動くことは稀であり、火野葦平もまた「糞尿譚」以来の作品は明瞭なる如く、本質的に自由主義者であること。

一、「麦と兵隊」「土と兵隊」「花と兵隊」等、日華事変中に書かれた諸作品は明らかにヒューマニズム立場にあつて、毫も軍国主義的色彩なく、したがつて、その時期の作品たる「広東進軍抄」「戦友に<sup>マ</sup>ふ」は同様の精神に基いて書かれ、すべての作品には兵隊たるの立場から、反戦的色彩すら濃厚であること。

一、太平洋戦争後、発表せられた「陸軍」は大本営報道部の命令に基づいて書かれたと聞きつたへてゐるが、然も尚兵隊の庶民精神を強調し、記録的構想の下に、軍の意向に叛いて、寧ろヒューマニズムを顕現せんと努めた事が歴然としてゐること。

一、尚、火野葦平の人格、思想、行動等は今後の日本再建に際して決して好ましくないからざる性質のものでなく、終始、芸術家として活動し、政治的意識の下に動いてゐたことではないこと。

右の理由によつて、今回の仮指定に就いては、慎重に再審査をされる様に希望し、非該当の決定をされる様に切願します。

昭和二十三年四月五日

志賀 直哉

内閣総理大臣

芦田 均 殿

志賀直哉らの必死の嘆願にも関わらず、昭和二三年、政府は「日華事変以来、同人は戦争に取材せる多数の著述を発表し、世に迎えられるものであるが、その著作に於て、概ねヒューマニズムの態度を離れなかつたとは云へ、『陸軍』『兵隊の地図』『敵将軍』『ヘイタインウタ』等に於ては、日本民族の優越感を強調し、戦争、特に太平洋戦争を是認し、戦意の昂揚に努めて居り、その影響力は広汎且つ多大であった。以上の理由により、同人は軍国主義に迎合して、その宣伝に協力した者と認めざるを得ない」という理由によつて火野葦平を公職追放としたのであった。

昭和二五年の朝鮮戦争勃発を機に、火野の追放が解除された。追放が解除されてからは、多くの新聞連載小説を執筆していく。中で

火野葦平の自己形成と教育

も、生家を描いた「花と龍」（「読売新聞」昭和二七年六月二〇日）二八年五月一日）は評判を得、のちに映画化されたり劇にもなった。また、敗戦前後の自分とその周囲の状況を反省をこめて描いた『革命前後』（昭和三五年一月三〇日、中央公論社）は、没後、芸術院賞を受賞する。昭和三五年一月二四日、「死にます。芥川龍之介とはちがふかも知れないが、或る漠然とした不安のために。すみません。おゆるし下さい。さやうなら」という遺書を残し、北九州市若松（河伯洞）で睡眠薬自殺した。以上が火野葦平の簡単な経歴である。

波瀾万丈の生涯を歩み、戦争責任を厳しく追及された火野葦平であるが、平野謙は、火野葦平のことを、戦争に翻弄された時代の犠牲者として、特高により虐殺された小林多喜二と表裏一体ととらえなければならぬとしている。<sup>4</sup>北九州若松の沖仲士「玉井組」の組長を継ぎながらも、常に労働者の立場を理解しようとし必死で、労働組合まで結成した火野葦平を、単純に戦争協力者、支配者などととらえることはできないであろう。

本稿では、火野葦平の本質を探るべく、小学、中学時代のことを考える。単なる紹介の域を脱し得ないかもしれないが、火野葦平という作家の自己形成基盤は何であったのかの一端がわかれば幸いである。



姓名	性別	生年	学歴		修業		成績		備考
			小学校	中学校	普通科	実科	普通科	実科	
火野葦平	男	明治三十二年	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
...	...	...	...	...	...	...	...	...	...

### 第十七学年修業之證

大正二十二年三月廿二日

姓名	火野葦平
生年	明治三十二年
修業科目	普通科、実科
成績	普通科 甲、実科 甲

此の修業之證は、本校に在りて修業したる十七学年の成績を以て、大正二十二年三月廿二日付に授けられたるものである。此の修業之證は、本校の修業規則に基き、授けられたるものである。

## 通告表

福岡縣若松市立若松男児尋常小學校

第十四學級第二學年  
**玉井勝則**

### 保 護 者 之 心 得

教育のこゝろは、教育行政の中心として、保護者の心を得ることにあり。保護者の心を得ることは、教育の成功の鍵である。保護者の心を得るためには、教育者として、保護者の心を理解し、尊重し、協力する必要がある。保護者の心を得ることは、教育の目的を達成するために不可欠である。

保護者の心を得るためには、教育者として、保護者の心を理解し、尊重し、協力する必要がある。保護者の心を得ることは、教育の目的を達成するために不可欠である。



日		月		年	
1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30
31					

### 第 三 學 年 修 業 之 證

大正五年三月十五日

姓名	火野葦平	年 月 日	三月十五日
級 別	第三學年	修 業 日 数	九十五日
評 定	甲	備 考	
授 課 教 師	王井勝則	校 長	王井勝則

## 通 告 表

福岡縣若松市立若松尋常小學校

王井勝則

保 護 者 心 得	
<p>我が子の成長に親として深く関心し、保護者の責任を十分に果たすことと心得て居ります。学校での教育活動に積極的に協力し、子供の健全な成長を願っております。</p>	<p>保護者の心得として、子供の生活リズムを整え、十分な休息を確保すること。また、学校での学習内容を家庭でもサポートし、子供の理解を深めたいと考えて居ります。</p>
<p>大正五年三月十五日 保護者 王井勝則</p>	





月	日	勤		怠	
		出席	欠席	出席	欠席
五月	一	○			
五月	二	○			
五月	三	○			
五月	四	○			
五月	五	○			
五月	六	○			
五月	七	○			
五月	八	○			
五月	九	○			
五月	十	○			
五月	十一	○			
五月	十二	○			
五月	十三	○			
五月	十四	○			
五月	十五	○			
五月	十六	○			
五月	十七	○			
五月	十八	○			
五月	十九	○			
五月	二十	○			
五月	二十一日	○			
五月	二十二日	○			
五月	二十三日	○			
五月	二十四日	○			
五月	二十五日	○			
五月	二十六日	○			
五月	二十七日	○			
五月	二十八日	○			
五月	二十九日	○			
五月	三十日	○			
五月	三十一日	○			
合計		31	0	0	0

### 第九學年修了之證

大正七年五月三十一日

此の修了證書は、第九學年修了の事實を證明するものである。此の修了證書は、第九學年修了の事實を證明するものである。此の修了證書は、第九學年修了の事實を證明するものである。

校長 〇〇〇〇

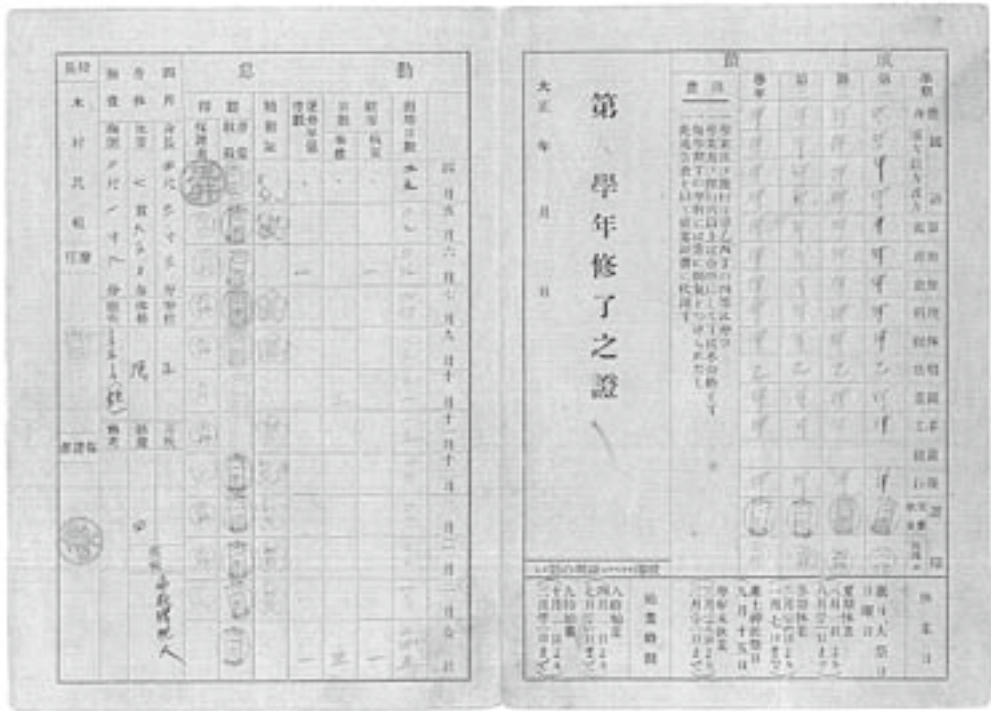
大正七年度

## 通告表

福岡縣若松市立若松尋常小學校  
第一五番番地第六學年

玉井勝則

示讀學生	家 庭 命 注 意
本年 月 日 現在學セルコトヲ證明ス	
六 五 年 四 月 日 若松尋常小學校校長 村 民 福	
一、此の通告は、第九學年修了の事實を證明するものである。此の修了證書は、第九學年修了の事實を證明するものである。此の修了證書は、第九學年修了の事實を證明するものである。	
二、此の修了證書は、第九學年修了の事實を證明するものである。此の修了證書は、第九學年修了の事實を證明するものである。此の修了證書は、第九學年修了の事實を證明するものである。	
三、此の修了證書は、第九學年修了の事實を證明するものである。此の修了證書は、第九學年修了の事實を證明するものである。此の修了證書は、第九學年修了の事實を證明するものである。	
四、此の修了證書は、第九學年修了の事實を證明するものである。此の修了證書は、第九學年修了の事實を證明するものである。此の修了證書は、第九學年修了の事實を證明するものである。	
五、此の修了證書は、第九學年修了の事實を證明するものである。此の修了證書は、第九學年修了の事實を證明するものである。此の修了證書は、第九學年修了の事實を證明するものである。	
六、此の修了證書は、第九學年修了の事實を證明するものである。此の修了證書は、第九學年修了の事實を證明するものである。此の修了證書は、第九學年修了の事實を證明するものである。	
七、此の修了證書は、第九學年修了の事實を證明するものである。此の修了證書は、第九學年修了の事實を證明するものである。此の修了證書は、第九學年修了の事實を證明するものである。	
八、此の修了證書は、第九學年修了の事實を證明するものである。此の修了證書は、第九學年修了の事實を證明するものである。此の修了證書は、第九學年修了の事實を證明するものである。	
九、此の修了證書は、第九學年修了の事實を證明するものである。此の修了證書は、第九學年修了の事實を證明するものである。此の修了證書は、第九學年修了の事實を證明するものである。	
十、此の修了證書は、第九學年修了の事實を證明するものである。此の修了證書は、第九學年修了の事實を證明するものである。此の修了證書は、第九學年修了の事實を證明するものである。	



一年から六年生までほとんどが甲の成績である。明治四一年創立の伝統ある小倉中学に進学することが、当然で得る成績だったといえよう。

## 二、火野葦平の小倉中学時代

大正八年四月、火野葦平は小倉中学校に入学する。小倉中学は、明治四一年五月に開校した学校で、火野葦平は、特一二期生となる。火野葦平自身の回想によると、小倉中学の「二年になるまでは画家たらんと志していた」<sup>5)</sup>が、松山にいる従兄の菅義則という文学青年に、夏目漱石の「吾輩は猫である」、「坊ちゃん」「二百十日」などを読むことを進められ、将来の志望が文学になったという。その後、手当たり次第に文学書を耽読するようになり、大正九年から日記をつけはじめたそうだ。小倉中学時代の日記については、許可がおりたので、大正一二年分の翻刻を、関西大学『文学論集』第五九巻二号に一部掲載したので、参照してほしい。

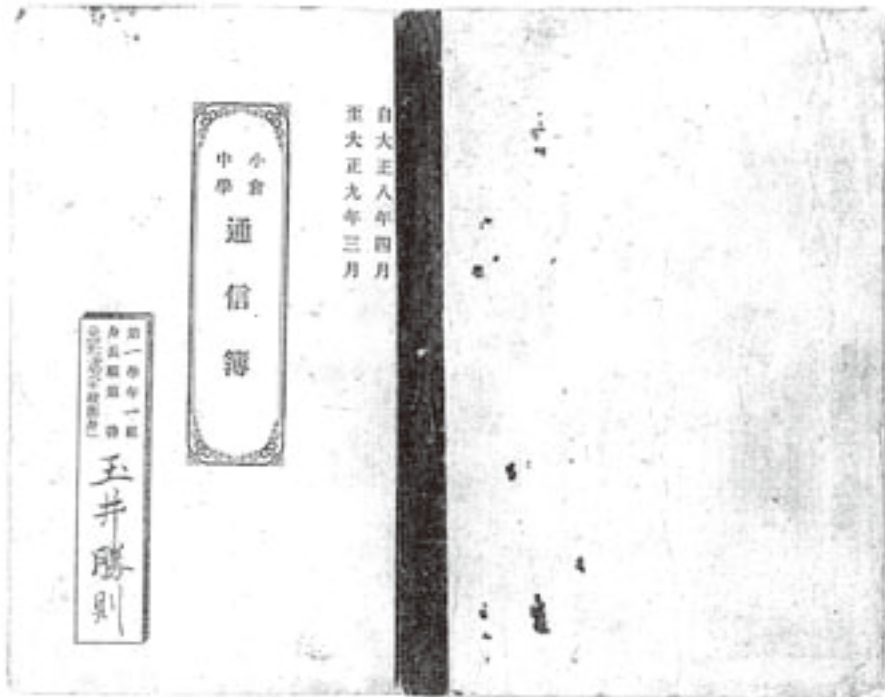
火野によると、ドストエフスキイ、ツルゲーネフ、芥川龍之介、佐藤春夫、武者小路実篤、北原白秋、日夏耿之介、萩原朔太郎などの文豪に傾倒していき、中学三年の時には、早稲田大学の文科に入ることを決意していたという。

さて、この中学時代の「成績表」を紹介する。四年間分が火野葦平資料館に所蔵されている。

小倉中学時代の「成績表」は、表紙に、「小倉中学通信簿」と記

された縦一八・三センチメートル×横一二・五センチメートルのものである。一学年から、三学年の「成績表」は、書式がほぼ同じである。一頁目に「保証人事項」が書かれ、二頁目に生徒の「生年月日」「出身学歴」「家庭所在地」などが記される。その後、「通信簿」についての注意事項が印刷される。その次の頁に、「出席統計日数」や「学業成績」「身体検査表」が書かれる。ただし、一学年のものにはないが、第二、第三学年の「通信簿」には、このあとに「通信事項」の頁がおかれる。その後、印刷された「生徒心得」「保証人心得」がある。第四学年も、内容はほぼ同じである。書式が少し変更され、一頁目に「保証人事項」、生徒の「生年月日」や「出身学歴」「家庭所在地」などが記される。その後の頁で「通信簿取扱二就テノ注意」が付され、次ページに「出席統計日数」や「学業成績」「身体検査表」、続いて「通信事項」がおかれる。最後に、印刷された「生徒心得」「保証人及父兄心得」などが記される。

以上、書式は学年で若干異なるが、内容はいずれも興味深いものである。印刷された「生徒心得」「保証人心得」などは、学校の生徒全員同じものであるもので、それらを省き火野葦平個人に関係する、「学業成績」「身体検査表」「出席統計日数」「通信事項」の部分を四学年全て紹介してみる。







一 此簿は、小倉市立第一中学校に在る児童の、進歩の記録を記すものなり。其の用は、児童の進歩を、教師、親、及び児童自身に知らせ、其の進歩を、更に進めしむるに在り。其の用は、児童の進歩を、教師、親、及び児童自身に知らせ、其の進歩を、更に進めしむるに在り。

二 此簿は、小倉市立第一中学校に在る児童の、進歩の記録を記すものなり。其の用は、児童の進歩を、教師、親、及び児童自身に知らせ、其の進歩を、更に進めしむるに在り。其の用は、児童の進歩を、教師、親、及び児童自身に知らせ、其の進歩を、更に進めしむるに在り。

三 此簿は、小倉市立第一中学校に在る児童の、進歩の記録を記すものなり。其の用は、児童の進歩を、教師、親、及び児童自身に知らせ、其の進歩を、更に進めしむるに在り。其の用は、児童の進歩を、教師、親、及び児童自身に知らせ、其の進歩を、更に進めしむるに在り。

四 此簿は、小倉市立第一中学校に在る児童の、進歩の記録を記すものなり。其の用は、児童の進歩を、教師、親、及び児童自身に知らせ、其の進歩を、更に進めしむるに在り。其の用は、児童の進歩を、教師、親、及び児童自身に知らせ、其の進歩を、更に進めしむるに在り。

五 此簿は、小倉市立第一中学校に在る児童の、進歩の記録を記すものなり。其の用は、児童の進歩を、教師、親、及び児童自身に知らせ、其の進歩を、更に進めしむるに在り。其の用は、児童の進歩を、教師、親、及び児童自身に知らせ、其の進歩を、更に進めしむるに在り。

保 證 人		生		姓 名	
氏名	玉井金五郎	生年月日	明治三〇年五月五日	姓	玉井
住所	福岡県若菜町	学年	第一学年	名	勝則
職業	無職	入学年月日	大正九年四月	姓	玉井
印		退学年月日		名	金五郎
備考		備考		姓	玉井
				名	勝則

表壳檢時令		總 成 業 學	
年 月	日	業 績	學 業
1911	12	...	...
1912	1	...	...
1912	15	...	...
1912	31	...	...
1913	1	...	...
1913	15	...	...
1913	31	...	...
1914	1	...	...
1914	15	...	...
1914	31	...	...
1915	1	...	...
1915	15	...	...
1915	31	...	...
1916	1	...	...
1916	15	...	...
1916	31	...	...
1917	1	...	...
1917	15	...	...
1917	31	...	...
1918	1	...	...
1918	15	...	...
1918	31	...	...
1919	1	...	...
1919	15	...	...
1919	31	...	...
1920	1	...	...
1920	15	...	...
1920	31	...	...
1921	1	...	...
1921	15	...	...
1921	31	...	...
1922	1	...	...
1922	15	...	...
1922	31	...	...
1923	1	...	...
1923	15	...	...
1923	31	...	...
1924	1	...	...
1924	15	...	...
1924	31	...	...
1925	1	...	...
1925	15	...	...
1925	31	...	...
1926	1	...	...
1926	15	...	...
1926	31	...	...
1927	1	...	...
1927	15	...	...
1927	31	...	...
1928	1	...	...
1928	15	...	...
1928	31	...	...
1929	1	...	...
1929	15	...	...
1929	31	...	...
1930	1	...	...
1930	15	...	...
1930	31	...	...
1931	1	...	...
1931	15	...	...
1931	31	...	...
1932	1	...	...
1932	15	...	...
1932	31	...	...
1933	1	...	...
1933	15	...	...
1933	31	...	...
1934	1	...	...
1934	15	...	...
1934	31	...	...
1935	1	...	...
1935	15	...	...
1935	31	...	...
1936	1	...	...
1936	15	...	...
1936	31	...	...
1937	1	...	...
1937	15	...	...
1937	31	...	...
1938	1	...	...
1938	15	...	...
1938	31	...	...
1939	1	...	...
1939	15	...	...
1939	31	...	...
1940	1	...	...
1940	15	...	...
1940	31	...	...
1941	1	...	...
1941	15	...	...
1941	31	...	...
1942	1	...	...
1942	15	...	...
1942	31	...	...
1943	1	...	...
1943	15	...	...
1943	31	...	...
1944	1	...	...
1944	15	...	...
1944	31	...	...
1945	1	...	...
1945	15	...	...
1945	31	...	...
1946	1	...	...
1946	15	...	...
1946	31	...	...
1947	1	...	...
1947	15	...	...
1947	31	...	...
1948	1	...	...
1948	15	...	...
1948	31	...	...
1949	1	...	...
1949	15	...	...
1949	31	...	...
1950	1	...	...
1950	15	...	...
1950	31	...	...
1951	1	...	...
1951	15	...	...
1951	31	...	...
1952	1	...	...
1952	15	...	...
1952	31	...	...
1953	1	...	...
1953	15	...	...
1953	31	...	...
1954	1	...	...
1954	15	...	...
1954	31	...	...
1955	1	...	...
1955	15	...	...
1955	31	...	...
1956	1	...	...
1956	15	...	...
1956	31	...	...
1957	1	...	...
1957	15	...	...
1957	31	...	...
1958	1	...	...
1958	15	...	...
1958	31	...	...
1959	1	...	...
1959	15	...	...
1959	31	...	...
1960	1	...	...
1960	15	...	...
1960	31	...	...
1961	1	...	...
1961	15	...	...
1961	31	...	...
1962	1	...	...
1962	15	...	...
1962	31	...	...
1963	1	...	...
1963	15	...	...
1963	31	...	...
1964	1	...	...
1964	15	...	...
1964	31	...	...
1965	1	...	...
1965	15	...	...
1965	31	...	...
1966	1	...	...
1966	15	...	...
1966	31	...	...
1967	1	...	...
1967	15	...	...
1967	31	...	...
1968	1	...	...
1968	15	...	...
1968	31	...	...
1969	1	...	...
1969	15	...	...
1969	31	...	...
1970	1	...	...
1970	15	...	...
1970	31	...	...
1971	1	...	...
1971	15	...	...
1971	31	...	...
1972	1	...	...
1972	15	...	...
1972	31	...	...
1973	1	...	...
1973	15	...	...
1973	31	...	...
1974	1	...	...
1974	15	...	...
1974	31	...	...
1975	1	...	...
1975	15	...	...
1975	31	...	...
1976	1	...	...
1976	15	...	...
1976	31	...	...
1977	1	...	...
1977	15	...	...
1977	31	...	...
1978	1	...	...
1978	15	...	...
1978	31	...	...
1979	1	...	...
1979	15	...	...
1979	31	...	...
1980	1	...	...
1980	15	...	...
1980	31	...	...
1981	1	...	...
1981	15	...	...
1981	31	...	...
1982	1	...	...
1982	15	...	...
1982	31	...	...
1983	1	...	...
1983	15	...	...
1983	31	...	...
1984	1	...	...
1984	15	...	...
1984	31	...	...
1985	1	...	...
1985	15	...	...
1985	31	...	...
1986	1	...	...
1986	15	...	...
1986	31	...	...
1987	1	...	...
1987	15	...	...
1987	31	...	...
1988	1	...	...
1988	15	...	...
1988	31	...	...
1989	1	...	...
1989	15	...	...
1989	31	...	...
1990	1	...	...
1990	15	...	...
1990	31	...	...
1991	1	...	...
1991	15	...	...
1991	31	...	...
1992	1	...	...
1992	15	...	...
1992	31	...	...
1993	1	...	...
1993	15	...	...
1993	31	...	...
1994	1	...	...
1994	15	...	...
1994	31	...	...
1995	1	...	...
1995	15	...	...
1995	31	...	...
1996	1	...	...
1996	15	...	...
1996	31	...	...
1997	1	...	...
1997	15	...	...
1997	31	...	...
1998	1	...	...
1998	15	...	...
1998	31	...	...
1999	1	...	...
1999	15	...	...
1999	31	...	...
2000	1	...	...
2000	15	...	...
2000	31	...	...
2001	1	...	...
2001	15	...	...
2001	31	...	...
2002	1	...	...
2002	15	...	...
2002	31	...	...
2003	1	...	...
2003	15	...	...
2003	31	...	...
2004	1	...	...
2004	15	...	...
2004	31	...	...
2005	1	...	...
2005	15	...	...
2005	31	...	...
2006	1	...	...
2006	15	...	...
2006	31	...	...
2007	1	...	...
2007	15	...	...
2007	31	...	...
2008	1	...	...
2008	15	...	...
2008	31	...	...
2009	1	...	...
2009	15	...	...
2009	31	...	...
2010	1	...	...
2010	15	...	...
2010	31	...	...
2011	1	...	...
2011	15	...	...
2011	31	...	...
2012	1	...	...
2012	15	...	...
2012	31	...	...
2013	1	...	...
2013	15	...	...
2013	31	...	...
2014	1	...	...
2014	15	...	...
2014	31	...	...
2015	1	...	...
2015	15	...	...
2015	31	...	...
2016	1	...	...
2016	15	...	...
2016	31	...	...
2017	1	...	...
2017	15	...	...
2017	31	...	...
2018	1	...	...
2018	15	...	...
2018	31	...	...
2019	1	...	...
2019	15	...	...
2019	31	...	...
2020	1	...	...
2020	15	...	...
2020	31	...	...
2021	1	...	...
2021	15	...	...
2021	31	...	...
2022	1	...	...
2022	15	...	...
2022	31	...	...
2023			



調查檢體券			總 成 果 表		計 統 票 出 年 學 星																		
中 心	校 區	檢 體	年 級	檢 體 數	檢 體 名 稱	檢 體 類 別	檢 體 材 質	檢 體 數 量	檢 體 價 值	檢 體 備 註	檢 體 出 處	檢 體 入 庫	檢 體 出 庫	檢 體 備 註	檢 體 出 處	檢 體 入 庫	檢 體 出 庫	檢 體 備 註	檢 體 出 處	檢 體 入 庫	檢 體 出 庫	檢 體 備 註	
1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000

月 份	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	備 註	檢 體 出 庫	檢 體 入 庫
1950															
1951															
1952															
1953															
1954															
1955															
1956															
1957															
1958															
1959															
1960															







これら、小倉中学時代の「成績表」を見てみると、第二学年までは、画家になりたいと考えていたこともあり、比較的二年生までの図画の成績は良好であった。火野葦平在学中の小倉中学の図画の先生杉田宇内は、俳人杉田久女の夫である。杉田宇内とはどんな人物であったのだろうか。

石昌子編「杉田久女年譜」(『杉田久女全集第二巻』一九八九年八月一日、立風書房)によると、久女は、明治四二年八月、一九歳で杉田宇内と結婚する。最初は宇内の実家のある愛知県に住んでいたが、東京上野美術学校西洋画科出身の宇内は、小倉中学奉職のため小倉に移り住んだという。宇内は長男であり、彼の実家は、養蚕、生糸、和紙業など多角的に事業経営を行い、村政にも関与して山林を持つ裕福な家であった。小倉中学在職中の宇内は、「釣やテニスを趣味とし、玄海の夜釣や沖釣など」を楽しむ「田舎育ちの野性的な一面」があり、久女はおだやかな人であった。大正九年、久女が父の納骨に行ったおりに病氣となり、実家に帰ったのをきっかけに離婚騒動がおきた。大正一〇年、久女三二歳の「年譜事項」に次のようにある。

宇内は腹の悪い人でないかわり単純で、久女の離婚したいという気持を夜昼責めたてた。亭主関白ともいえる時代だったので、久女は泣きの涙で家を飛び出さねば喧嘩は止まなかった。宇内は病的なくらい執拗で、久女を怒らせ、目を吊り上げるまでにしなければすまなかった。怒れば久女の方が

強かったにせよ、怒らせるまでに挑発するのはいつも宇内の方であった。中学教師は嫌いといった久女の言い分は表面的な単純なものではなく、宇内の性格的なものに対する批判と非難が籠っている。

このような、杉田夫婦の離婚騒動の起きている、大正八年〜十一年が、火野葦平の小倉中学在学中であった。宇内は、昭和二〇年に妻久女を亡くしたとき「自責にさいなまれ」元気がなかった<sup>6</sup>というが、火野葦平は家庭問題の起きていたときに在学していた。久女の亡くなった頃から宇内は「バネ」というニックネームを生徒からつけられたらしいが、

スプリングが跳ねるようにひよっこひよっこ歩かれるところから来ている。痩せ型、色白のちよび髭の先生。創立と同時に新進気鋭の先生として就任。以来学校の主となり、バネさんに睨まれると一巻の終りだと聞いていたが、にっこりされたときは、目が細くなり優しかった。(中略)校舎の間の小さな池の回りに萩が植えてあり先生が大切にしておられた。春のある朝、元氣よく芽立っていた萩の芽を腕白者が棒で撫斬りにした。犯人はすぐ申し出た。先生は涙を流しながらその生徒に自然の大切さを諭されたという。伝統の白脚件を守るために、下関要塞司令部に涙の直訴をされたが、残念ながら取り上げられなかった。(中略)小倉中学をこよなく愛されたお一人であった。<sup>7</sup>

とある。これは、葦平在学中の、宇内回想録ではないが、優しく熱意のある教師だったようだ。慕う生徒が多く、ボナールの弟子である画家楠目成照などもその一人であった。火野葦平も宇内先生に「君は美術学校に行くといいね」と勧められたという。宇内は、「いつも他人のために力をつくし」、「人望高くすばらしい教師といわれた」<sup>⑧</sup>そうだ。晩年には教育功労者の表彰を受け、小倉名誉市民にもなった。

さて、横道にそれだが、火野葦平の小倉中学時代の「成績表」に話を戻そう。「成績表」を見ると一目瞭然だが、明らかに小学校と比べて成績が落ちている。席次に注目してほしい。大正八年四月から、九年の三月までの一年生の成績を見てみる。一学期の席次は、一八九人中二五番で、二期には、一八三人中五九番、三期には一六七人中四四番となった。大正九年四月から大正一〇年三月までの二年生の席次は、一学期一六四人中八九番、二期一五五人中七九番、三期一四九人中五九番、大正一〇年四月から大正一一年三月までの三年生の席次は、一学期一六〇人中七一番、二期一五九人中七七番、三期一四八人中一〇一番、大正一二年三月からの四年生の席次は、一学期一四六人中一〇一番、二期は一四七人中八七番である。成績は、徐々に悪くなり、しかも大正一二年の陥落は激しい。

これは、火野葦平の初恋の相手である、火野より二つ年上の女生静子さんとの恋愛の煩悶が一因となっているらしい。静子さん

は、若松の正保寺町の自宅のすぐ前にあった志道聞多氏のお嬢さんであった。この火野と静子さんとの恋愛については、火野葦平が次の如くに記している。

私より二つ年上の女生生静子さんと少年らしい恋をした。そして、結婚するといつて、私の両親や先方の両親も手こずらせた。「大正十年を送る」という題の作文に、静子さんのことを書いたところ、国語と作文受持の高橋純之先生が、「諸君の中に、これについて書いた者がある」といって、黒板一杯に、「恋」の一字を書いた。そして、「まだ少年のうちから、こんなことではいけない。恋なんかするのは大人になつてからのこと、きれいに忘れて、上級学校へ進む勉強に励んだ方がいいね」といつた。私の名はいわなかつたけれども、クラス・メートたちは知っているので、私は赤面した。しかし、心の中では、どうして少年なら恋愛をしてはいけないのかと反撥していた。(中略)しかし、高橋先生は私を愛してくれ、他の先生がほとんど反対していたにもかかわらず、私の早大希望を援助してくれた。当時、小倉中学は模範的な秀才学校だったので、文学などをやる生徒は不良視されていたのである。<sup>⑩</sup>

だが、静子さんとの恋愛はうまくいかなかったようで、「火野葦平日記」の大正一二年を見ると、一月三日に、

自分はSのことを考へるのを恐れた。それよりSのことは日記に特記するには及ばない迄に忘れてしまひたかつた。しか

し今日自分は去年のやうにこの苦痛を享樂して見ようと思つた。Sの事についていろんな連想を逞うして煩悶に戦を挑んで見ようと思つた。そして苦しまぎれに押しつめた揚句は彼女を「全く知らない女とするより外はない」であつた。(中略)自分は文学によることを誓つてゐるのだ。あ、暗闇だ……さうだ、勉強しなくては……明日から心を入れかへやう、兎に角苦しい。

一月六日に、

モウパッサンの「美貌の友」を読んでゐてSの家からかるたを読む声がかこえて来て自分の心を奪つてしまつたには弱つた。だめだ！と幾度心を叱りつけてもよむことが少しも頭に這入らないのだ。自分は情なくなつて顔を本の上につつぶした。自分はすっかり愛慾の煩悶から抜け切つてゐないのだ。かう考へると涙のにじむやうな淋しさが急に身のまはりを吹き流れた。

とあり、勉強をしなければならないのに、忘れたくても忘れられない静子さんとの恋愛に苦悶し、勉強に集中できない十七歳の思春期時代の火野葦平の姿がよくわかる。そこで成績も下がつたのである。

また、大正一二年の「火野葦平日記」一月一〇日には、次のようにある。

去年行つた国漢模擬試験の作文と書取の答案を貰つた。作

文が五十点、総点八十点なのだが、作文が四十七点で総点程度七十点あつた。作文は四十七点が井上と自分とで最高点のやうだ。驚いたことには作文に十五点、十点などの可成あることだ。自分は稍作文には自信を持つてゐる。だが国漢に自信があるに反して数学に全然バクテリアの細菌程の自信の持てないが情ないやうだ。自分は多分国漢で通つて数学で二るだらう。

数学ができなかつたことにも、悩んでいたやうだ。悩みながらも、火野葦平は、小倉中学では野球選手で、「捕手を勤め、三番か四番を打つて」、マンドリンの稽古もはじめた。

また、火野葦平は小倉中学時代のことを次のように回想している。

私はあまり成績がよいほうではなかつた。科目に好ききらいがはなはだしいので、きよくたんな差がつき、平均するとどうしても上位になれない。今でもそうだが、小倉中学は秀才主義教育が徹底しており、どんな学科も平均してよくでき、十番以内にはいらないと、学校からも先生からも気にいられなかつた。しかし、私は国語、漢文、作文、図画、英語、歴史などの好きな科目は、いくらか人よりずばぬけていたが、きらいな数学、代数、幾何、化学、物理などはサツパリで、最低点だつた。そのころは、甲乙丙丁という点のつけ方をしていたが、代数、幾何などは丁のもう一つ下の戊で、代数の

教師などは、いつも私に「おまえは低能ではないか。」といていた。三年から野球部にはいると、成績はいつそうさがった。それまでは二十番から三十番くらいの間をウロウロしていたのに、野球選手になって練習で時間をとられるようになって、百六十人くらいの中、とうとう五十三番になってしまった。心配した父が、学校に行つて受持教師にきくと、「やればできるのに、まるでやる気がないのでしかたがない。いくら先生がいつても相手にしない。困つた子だ。」といったと

いうことである。私は別に先生を相手にしなかつたわけではなく、いやでたまらない科目に不必要な努力をついやしてよい点をとるよりも、好きな科目のほうを少しでもよけい勉強したほうがよいと考えていただけだ。十番以内にはいりたいことも、級長や副級長になりたいことも、先生に気に入られようと考えたことも無かつた。<sup>13)</sup>

火野葦平は、大正二二年一月八日の日記に「四年から試験を受けるものは皆同じ組になるのだ。俺達の組はたつた二十六人しかゐない。皆四年から受けやうと云ふ、そして自信のありさうな顔ばかりである」とあり、同年一月九日の日記に「自分は合格しなかつたら四年で止めて労働に入らう。労働にあつて文学を嗜まう。Sが何と思はうがどうあるのだ」と記しているが、その後、中学四年から、順調に早稲田第一高等学院を受験して入学する。

以上、簡単に若松尋常小学校、小倉中学時代の「成績表」につい

て記してみた。今後は、現在翻刻をすすめている日記なども併せて考察し、火野葦平の小説家としての自己形成を探っていきたいと思う。

なお、本研究を成すにあたつて、火野葦平の御三男玉井史太郎様、火野葦平資料館の市川嘉男様ならびに資料館の皆様方にお世話になりました。また、貴重な資料の紹介を快諾していただき、心より御礼申し上げます。

(1) 『火野葦平詩画集』（平成二二年二月、葦平と河伯洞の会）に、若松尋常小学校時代の「成績表」の一部が画像で入れてある。

(2) 火野葦平「年譜」〔「火野葦平選集（第8巻）」昭和三四年六月三〇日、創元社〕

(3) 火野葦平展運営委員会編『火野葦平展』（平成六年一月二七日、北九州市教育委員会）

(4) 平野謙「政治と文学（二）」〔新潮〕昭和二年一月一日

(5) 2に同じ

(6) 佐野正幸「杉田宇内先生、楠目成照さん、ピエール・ボナールの絵をめぐるの不思議な邂逅」〔愛宕丘の四季〕平成一〇年三月一日、福岡県立小倉高等学校明陵同窓会 沖栄一郎発行

(7) 平井隆二「先生方の横顔」〔愛宕丘の四季〕同

(8) 火野葦平「私の中学時代」〔中学時代〕昭和三三年一〇月一日

(9) 三宅千代「天才を捨てた男―わが愛の杉田宇内」〔愛宕丘の四季〕同右

(10) 2に同じ

(11) 増田周子「火野葦平自筆日記翻刻（大正十二年）I」〔関西大学「文学論集」第五九巻第二号〕参照

(12) 2に同じ

(13) 8に同じ

本稿は、科研費補助金(21242001)の助成を受けました。感謝申し上げます。

# Self-Formation and the Education of Ashihei Hino:

His Report Cards from Wakamatsu Elementary School and Kokura Junior High School

MASUDA Chikako

In this paper, I will present Ashihei Hino's report cards from Wakamatsu elementary school and Kokura junior high school and thus, consider his self-formation as a writer from the viewpoint of his education. Hino Ashihei Memorial Exhibit has his report cards for the six years that he spent at Wakamatsu (1913-1919) and the four years at Kokura (1919-1923). These report cards and *The Diary of Hino Ashihei* (1923, reprinted by Chikako Masuda) show that he was a regular young man who was worried about his love life and who loved art and literature. He decided to be a writer when he was at Kokura junior high school. He served as a soldier in the Sino-Japanese War and wrote for the Japanese army during the Pacific War. Sometime after the war, he was banned from holding public office temporarily. Although the war changed the course of his life, we understand that he used to be just a young man who loved art and literature.